

横浜華僑・華人社会におけるエスニシティの形成

若麻 續 明 里

日本の代表的華僑・華人社会、横浜中華街は今や年間1,800万人の集客数を誇る大観光地であるが、19世紀中頃のその一帯は「横浜村」と呼ばれる低湿地の一漁村に過ぎなかった。

日米修好通商条約締結後、開設された外国商館付きの買弁や通訳から転じた中国商人達が、外国商館が環境の良い山手の新居留地に移った後、その跡地に集住し、独自の経済活動を始めたのが現在の横浜中華街の起源といわれているが、この様に商人達が中心となって形成された近代日本の華僑・華人社会に対して、他のアジア地域、特に東南アジアで展開していった華僑・華人社会では、その基礎を築き上げたのは植民地時代、中国から労働力として大量移入した「苦力」であった。東南アジアのそれぞれの国が近代国家へと変貌しつつある現在、「華人国家」シンガポールをはじめ、多民族国家における華僑・華人の影響力は国全体にまで及ぶまでに至っているのは周知の事実である。

国民国家の枠組みの中で、常に居住国住民及び他の民族集団との緊張と軋轢を経験せざるをえない状況下で強化されつづけている東南アジア華僑・華人の「我々意識」、「エスニシティ」に対して、在日華僑・華人の「エスニシティ」はどの様にして形成されるのであろうか。

本稿では、以上の問題意識を念頭においた上で、日常的な宗教儀礼などの伝統文化の継承の在り方と華僑・華人としての生活観、生き方に関して、横浜中華街で行ったアンケート・聞き取り調査をもとに分析・考察を試みた。

これらの調査では、まず、生活全般で顕著な「日本化」が進む中で、自らの「中華人性」を伝統儀礼に求める傾向がみられる。清明節などの先祖供養会に代表される内的な儀礼はもとより、それとは対比的に観光地・中華街のイベントとしての色彩を強め、対外的にも重要な行事となっている関帝誕祭などで、長年「二つの中国」を支持するグループが対立してきた横浜中華街には、「中台和解」という最近のゆるやかな政治の流れの中で、一致への胎動ともいうべき協力体制が整ってきている。これも中華街の発展を旨とし、華僑・華人社会の「我々意識」を強める「エスニシティの形成」のための新たな要因である。

またもうひとつの要因として注目したいのは、華僑・華人社会特有の相互扶助的組織、「同郷会」にみる地縁血縁による結束意識に基づいて活動しているグループの存在である。結束意識は時代の変遷と共に変化し、それぞれの行き方が反映される華僑・華人の「我々意識」によって強化される。これは華僑女性のグループ、「華僑婦女会」が、華僑・華人社会の女性の地位向上や自立のために地道な活動をつづけ、「華僑・華人社会」特有の封建性を改革し、同時に華僑・華人女性であることにこだわりつづける事によって、生まれ育った横浜中華街の華僑・華人社会がコミュニティとして現代にふさわしい存在である様、模索している事に集約されている。これらの新たな活動は、歴史的な、エキゾチックな街から、横浜中華街を華僑・華人の活力あるエスニック・コミュニティへと変えていく原動力となるだろう。